

2020/9/9

(うと Q 世話し なぜ自分の中に軸がないのか？いつの間に他人目線の中に軸が移ってしまったのか？ 答えは幼少期にあり？)

「何故、自分の中に軸がないのか？」

「いつの間に、他人目線の中に軸が移ってしまったのか？」

を、つらつら考えてみていたところ、何となく次の言葉達が浮かんできました。

曰く

「出る釘は打たれる」「壁に耳あり障子に目あり」「触らぬ神に祟りなし」「臭いものには蓋」  
そうして、その最後の言葉からの連想で浮かんだ「極めつけ」は、幼少期の排便の躰の厳しさでした。

「何度言ったら分かるの!!おもらししちゃダメでしょ!!おもらしたらお母さんが恥をかくんだからね!!」

自分の背後から響くその声。その監視の目。

そうしてその核心は

「親が恥をかく」の「親の恥」の「恥」

もうこの段階で、子供は「恥」という最重要概念を教え込まされ「人の顔色、しかも最近親者の顔色すらも窺うようになってしまう」のではないか。

そうしてその後、上記の言葉たちの順番を反対にすると

「臭いものには蓋」から始まり「触らぬ神に祟りなし」更に「壁に耳あり障子に目あり」と続いて最後に「出る釘は打たれる」から「見ざる言わざる聞かざる」となって沈黙してしまう。

即ち

「子供である自分に正当性はない。幼児期に於いて「見放されたら大変」になる親に殺生与奪の権限がある。つまり自分以外の他者目線の中に全ての権限がある」

と、無意識裡に教え込まれる。

想像してみてください

排便で失敗しないかどうかと緊張しまくっている、その後ろから「怖い親の目」に晒され、あたかも平均台の上を背後からナイフを突きつけられながら歩くような幼子の焦りや体の強張りを。

「親=恥=恐怖=沈黙」

そうしてそれと引き換えに失うのが「自分の声=自信」

結局「恥の元」である自分が「自分の声=自信」を持つのは大きな間違いだから「出る釘は打たれる」ことにしかならないとなり「自信のなさ」と「沈黙」だけが残る。

つまり「自信のなさ」が「他人目線の中に自分の軸を明け渡している」

或いはその反対に「他人目線」が「自信を持つことを非難している」とも。

最後にこれらを別の言葉で纏めてみると

「親がマニュアル通りにできないことを恥じ、子も又マニュアル通りにできないことを恥じる」

そこに大元の原因があるような気がしております。

で、最後の疑問

「じゃあ、マニュアルって何？」

手引き？定型？

又々ここでも、我が国固有の様式（美）？